

戯曲

青鬼（あおおに）

上演時間 約90分

2021年1月8日バージョン

作 鈴木 アツト

登場人物

- 猫宮亮平
- 猫宮亜乃
- プーチン・ピチルブルク
- 井ノ口
- 蘇我野園楽
- 古小町（管理人）
- 密輸業者・医者1・看護婦
- 漁師・医者2

注 本作品の無断上演を禁じます。上演をご希望の場合は、

info@innzou.com 宛にお問い合わせください。

第1場 マンション・猫宮家の部屋・夜

舞台の中央奥に水槽がある。その前で、口論する亜乃と亮平。

板付き。亮平、部屋の臭いを嗅いでいる。

亮平「食べただろ？」

亜乃「食べないよ。あなたじゃないんだから」

亮平「でもないじゃない？どこにも」

亜乃「私も驚いてるの。久し振りに早く帰れて家で水槽でも眺めながらポーっと思うたらいないんだもん」

亮平「いないはずないだろ？朝、餌やった時にはちゃんといたんだから」

亜乃「でもどこをどう探してもいないのよ」

亮平「なんでいないんだよ？」

亜乃「だから私に言われてもわかんないもん」

2

亮平、水槽の横の床を、神経質に触る。

亮平「濡れてる」

亜乃「そう。濡れてんのよ」

亮平「正直に言えって」

亜乃「何を？」

亮平「本当は食べたんだろ？水槽から出して」

亜乃「食べてないって」

亮平「じゃあなんでここが濡れてんだよ？」

亜乃「逃げたんじゃない？」

亮平「犬や猫じゃないんだよ？どうやってアレが水槽から逃げんだ

よ？」

亜乃「でも哺乳類だから」

亮平「だから？」

亜乃「進化したのかも」

亮平「なにそれ？」

亜乃「だから魚が進化して陸に上がったみたいになれね」

亮平「会社行って帰って来る間に？ありえない」

亜乃「ありえない。こともないと思っつよ」

亮平「怪しい」

亜乃「なによ？」

亮平「何か隠してるだろ？」

亜乃「隠さないよ」

亮平「どこだよ？どこに隠した？俺のアレ」

亜乃「(観客に)もちろん私は隠していた。というのも今から時間を

巻き戻して二時間前」

亮平の時間が巻き戻り、亮平、退場。

亜乃「いつもより早く仕事が終わって帰宅してみると」

第2場 マンション・猫宮家の部屋・夕方(2時間前)

イルカ、水槽から、ビシヨビシヨになってちよつと出てくる
ところ。

亜乃「進化したアレが水槽から逃げ出していた。(イルカに)誰？」

イルカ、周囲を見回し、顔を伏せる。

亜乃「あんたよあんた」

イルカ「僕？」

亜乃「そう、あんた」

イルカ「いやあ、どうもどうも水道局の如月です」

亜乃「水道局？」

イルカ「横浜市の」

亜乃「ああ、市のね」

イルカ「そう、横浜市のですよ。あ、この水槽ね。ほら、お宅の水の使用量すごいでしょ？検査に来たんすよ、水道管の（頭から潮を噴く）あつ」

亜乃「今の何？」

イルカ「え？今の？（頭から潮を噴く）あつ」

亜乃「それ！」

イルカ「いや、今、修理しますから、あつ漏れ（る）」

イルカの頭から潮がピューっと出る。

亜乃「（前の台詞にかぶる）ちょっと待って」

イルカ「参ったなあ。我慢できなくて、んー」

亜乃「これ潮でしょ？あなた、潮噴いてるんでしょ？」

イルカ「違いますよ。水道管が」

亜乃「この硬いの鱭でしょ？」

イルカ「違います。肩こりです」

亜乃「あなた、海豚でしょ？」

イルカ「（逆ギレで）どこをどう見て海豚なんだ！」

亜乃「（前に立ち塞がって）どこ行くの？逃げる気？」

対峙する、イルカと亜乃。

イルカ「逃げないっすよ」

亜乃「逃げる気でしょ？」

イルカ「逃げませんって！（逃げ出そうとして足を踏み出すが、その一歩が重い）あれ？身体が重い。なんだこの存在の耐えられない重さは？」

亜乃「重力でしょ？水の中じゃないから」

イルカ「重力？」

イルカ、もう一度、重い一歩を踏み出すが、身体が重すぎて、手をついてしまう。

イルカ「（亜乃の方を向き）見逃してくださいー！」

亜乃「やっぱり逃げるんじゃないん」

イルカ「あなた海豚食べるの飽きたんでしょ？」

亜乃「あんたはあの人の好物なの。海豚を逃がしたなんてバレたらそれこそ私が追い出される」

イルカ「僕、中年ですから、美味しくないですから」

亜乃「食べてみなきゃわかんない」

イルカ「僕、本当に美味しくないんです。人間で言うともう50歳ぐらいなんです。もう皮なんて皺くちやでお肌ハリが全然ない。

（自分の鰭をアングツと噛んで）歯応えもない！」

亜乃「・・・」

イルカ「お願い！食べないで！」

イルカ、亜乃に泣きつく。

亜乃「（観客に）亮平がホッキョクヒメイルカを月に一回密輸するよ

うになったのは私達の新婚旅行がきっかけだった」

亜乃が語っているうちに、イルカ、退場。亮平、いかにも、ハネムーンといった格好で登場。

第3場 新婚旅行・アラスカ・ショッピングモール

亜乃、はしやぎながらショッピングしている。

亮平「あのさあ」

亜乃「何よ」

亮平「ハネムーンだよな？」

亜乃「そうよ」

亮平「一生に一回だよな？」

亜乃「そうよ」

亮平「なーんで毎日ショッピングばっかなの？」

亜乃「だって安いんだもん」

亮平「そんなの日本でも買えるだろ？」

亜乃「買えるけど日本より安いだよ」

亮平「免税だからね。わかるよ。わかるけどさ。毎日じゃなくてもいいじゃない」

亜乃「お店がたくさんあるんだもん。毎日通っても全部見きれないの」

亮平「じゃあ食事は？」

亜乃「私のレストラン選びが何か問題？」

亮平「美味しいよ。美味しいけどさ。なんで日本食オンリーなんだよ。」

亜乃「外国で日本食頼むとどんなのが出てくるのか楽しみじゃん。」

見たでしょ？昨日のエビフライ。あんな馬鹿でかいエビフライ、日本じゃ食べられないわ」

亮平「せっかくアラスカまで来たんだからここでもしか食べれないもの食べようよ」

亜乃「例えば？」

亮平「キング・サーモンとかさ」

亜乃「一昨日食べたじゃん。鮭茶漬け」

亮平「アラスカタラバガニは？」

亜乃「日本の蟹缶のほとんどアラスカ産だよ」

亮平「アラスカブルーベリージャム！」

亜乃「お土産用に買いました」

亮平「じゃあ、じゃあ、じゃあ」

蘇我野の声「海豚とかどうですか？」

蘇我野、登場。

亜乃「誰？」

蘇我野「喋らず、ゆっくりと二人に近づいていき」私、蘇我野園樂と申します。日本人ですよ。蘇れ、我らの、野原と書いてソガノですよ。すみません。立ち聞きするつもりはなかったんですが、

私、そのレストラン楽園で総支配人やってまして」

亜乃「レストラン楽園？」

蘇我野「アラスカ料理。正確には原住民料理。俗に言うエスキモ料理です」

亜乃「どんな料理があるんですか？」

蘇我野「ここだけの話イキのいいホッキョクヒメイルカが入りまして」

亜乃「ホッキョクヒメイルカ？」

蘇我野 「ここら辺でこの時期だけ捕れるイルカなんですけどね」

亜乃 「美味しいんですか？」

蘇我野 「そりやあもつ。アラスカに来たなら一度は食べないともつ
たいない味ですよ」

亜乃 「(亮平に) だって」

亮平 「俺、嫌だよ」

亜乃 「え？なんで？」

亮平 「だって亜乃、海豚だよ？」

亜乃 「うん」

亮平 「うんって。かわいいのになんで食べちゃうの？」

亜乃 「あれ？さっきここでしか食べれないもの食べたって言って
なかった？」

亮平 「言ったけどさ」

亜乃 「せっかくアラスカまで来たのよ。なんか記念になるもの食べ
ましようよ」

亮平 「別にイルカを記念に食べなくていいです」

亜乃 「(蘇我野に) でも美味しいんですよね？」

蘇我野 「究極の美味です」

亜乃 「(亮平に) ほらあ」

亮平 「なんで君は、そう野蠻なんだ？」

蘇我野 「まあ無理には言いませんがとっても美味しいですよ」

亮平 「俺は食べないぞ」

蘇我野 「セックスにいいんですけどね」

亮平 「セックス？」

亜乃 「やだあー！」

蘇我野 「ここだけの話、精力に効くと言われています。しかも美容
にいい。なんたって海豚は海の豚と書きます。豚肉のようにコラ
ーゲンがたくさんあってもおかしくない。しかも海豚の脂肪の構

成分は不飽和脂肪酸。牛や豚の肉と違ってコレステロールを下げる。つまり太りにくいんです。美容によくてしかもセックスに

もしい。最高じゃん？」

亮平「そんな挑発には乗らないぞ」

亜乃「でも一口だけならよくない？」

亮平「・・・」

亜乃「物は試して言うし」

亮平「お前、その目はしたないぞ！」

亜乃「ハネムーンよ？」

亮平「・・・」

亜乃「ホテルに帰って別々のベッドで寝るの？」

蘇我野「なんならマッサージにうかがいますよ」

亮平「一口だけだからね」

亜乃「(観客に)私は嫌がる亮平をなんとか説得してその店で食事を取ることに成功した」

すると、空間はレストラン楽園に変わる。

第4場 アラスカ・レストラン楽園

亮平「絶対一口しか食べないからね」

亜乃「わかったって」

亮平「一口だけだからね」

亜乃「わかったって」

亮平「それにしても汚い店だな」

蘇我野、お皿を持って、登場。

蘇我野「お待たせしました！」

亜乃「(観客に)蘇我野が持ってきた海豚料理は海豚の丸焼き！ではなくて、予想に反して和牛のタタキのような簡素な海豚のお刺身だった」

蘇我野「今までの海豚料理って見た目が海豚ぼいんだ。海豚なんだから当たり前なんだけどね。でも海豚を想像できちゃうと海豚は食べられない。なんで海豚食べるの？超かわいそう！私無理無理――！私なんでもっと無理――！みたいなさ。それで海豚ぼくない海豚料理を創ることを考えついたんです。そしたら繁盛しちゃって」

蘇我野の長い前置きに耐え切れず、亜乃と亮平、箸を伸ばす。

蘇我野「二人を注意するように()わさびつけてね」

亜乃と亮平、わさびをつけて、海豚のタタキを食べる。

亜乃「うん、私は美味しいと思うけど」

蘇我野「どっつ？」

亮平、静かだが響く声で、

亮平「こはんもらえる？」

蘇我野、得意そうに亮平の様子を眺め、笑いながら、

蘇我野「かしこまりました！」

蘇我野、退場。

亜乃「海豚のタタキは亮平の食生活を大胆に変えた。(亮平、眼鏡をとってイケメンポーズ。亜乃は空間を横浜港に変える) 帰国した亮平は毎日のように海豚のタタキを欲しがった」

亮平「本当に捕れないの?」

第5場A 横浜湾・モーターボート

漁師、登場。 亜乃、退場。

漁師「すみません」

亮平「(潮の香りを嗅ぎながら) またまた嘘ついちゃって」

漁師「いや、ほんとに捕れないっす」

亮平「(鼻が反応しない) ここまで来てまだ冗談?」

漁師「ですから、ホッキョクヒメイルカなんて聞いたことないっす」

亮平「ここは海の街だろ?」

漁師「横浜じゃ海豚は捕れないっす」

亮平「わかった。じゃシーパラから捕ってこよう」

漁師「捕れるわけないでしょ?」

亮平「一匹でいいんだよ?」

漁師「数の問題じゃないっす。シーパラの海豚は子供たちのアイドルっす」

亮平「そうやって海豚で子供食い物にしゃがって。なんで食べさせ

てくれないんだよ?」

漁師「なんでそんなに食べたいんですか?」

亮平「美味いんだよ」

漁師「美味しくても捕るの禁止されてるし誰も食べたがらないっす

よ

亮平「50年前は給食に出てたんだぞ？」

漁師「今は違うんです」

亮平「偽善だよ！」

漁師「え？」

亮平「お前らなんか、偽善者野郎だ！」

漁師「なんだって？」

第5場B 中華街・中華料理屋

中国人の密輸業者、登場。漁師、退場。亮平と密輸業者、回
転テーブルをはさんで会話。

密輸業者「表向きは捕っちゃいけないことになってる魚なんたよ」

亮平「月に一回でいいんだ」

密輸業者「タメね」

亮平「俺が頼んでるんだぜ？」

密輸業者「ワシントン条約には勝てないね」

亮平「親父の代からの付き合いじゃない？」

密輸業者「中華街変わった。街変われば人変わる」

亮平「そんなこと言わないでお願いしますよ！」

密輸業者「そう言われてもタメなものはタメね」

亮平「お願いします!!」

密輸業者「・・・」

亮平「・・・」

密輸業者「高いよ」

亮平「大丈夫、払えますから」

密輸業者「現金(げんなま)は円(イエン)に限るね」

亜乃、登場。密輸業者、退場。

第5場C マンション・猫宮家の部屋・夜

亜乃「(観客に) 夫は何より勤勉なビジネスマンだった。調査用に生け捕りにされた海豚を横流しにしてみらうだけの資金的余裕があった。そしてある日亮平はイケスを買った。(亮平に) どうしたの？

この水槽」

亮平「これから月に一回うちに海豚が届くことになったから」

亜乃「え？なんのために？」

亮平「対話のために」

亜乃「はい？」

亮平「人間と海豚の対話のためだよ」

亜乃「なんで海豚とわざわざ対話しなきゃいけないの？大体最後は食べるんだよね？」

亮平「食べるよ。でも食べる前に対話が必要なんだ。俺達みたいに冬場でも暖房でヌクヌク生活してる現代人には自然との対話が必要なんだよ」

亜乃「それで海豚を飼うの？」

亮平「そうだよ」

亜乃「うちのマンション、ペット禁止なのわかってるよね？」

亮平「海豚はペットじゃない。食材だよ」

亜乃「だからってこんなでっかい水槽買わなくてもいいでしょ？」

亮平「これは水槽じゃない。イケス」

亜乃「同じだって」

亮平「最初に海豚食べろって言ったの亜乃だよ？」

亜乃「アラスカ行った記念にちよっと食べたかっただけよ。ちよっとでよかったの。もう食べ飽きたし私は自分で養殖するほど海豚

に飢えてない」

亮平「俺はまだ飢えてる。あの味が、いや、あの軽さが必要なんだ」
亜乃「観客に）たしかに亮平はあの軽さを必要としていた。そして、
海豚も軽さを必要としていた。こんな風に」

イルカ、登場。亮平、退場。イルカ、身体が重い。

第6場 マンション・猫宮家の部屋・夕方

イルカ「僕、本当に美味しくないんです。人間で言うともう50歳
ぐらいなんです。もう皮なんて皺くちやでお肌にもハリがなくて
だから歯応えもない」

亜乃「・・・」

イルカ「お願い！食べないで！」

イルカ、亜乃に泣きつく。亜乃、イルカから視線をはずして、

亜乃「ごめん。食べる」

イルカ「こんなにかわいいのになんで？」

亜乃「なんでって美味しいからよ」

イルカ「わかったよ。認める。僕は美味しい。でも考えてみて。
僕はあの水槽に入っていた。つまりペットなんだ。あなた犬食べ
ないでしょ？あなた猫食べないでしょ？あなた海豚食べない」

亜乃「あれを水槽だと思ってるみたいだけどよく見て」

イルカ「ん？」

亜乃「あれは水槽じゃない。イクス」

イルカ「キューー！」

亜乃「私エビ食べる。私カニ食べる。私魚食べる」

イルカ「魚じゃないのよ海豚は。哺乳類なのよ」
亜乃「わかっているわよ。その食感^{シカン}は魚であって魚じゃなくて哺乳類であって哺乳類じゃない。独特だもんね」

イルカ、フラフラと歩き、体育座り。

亜乃「ごめんね」

イルカ「いいです」

亜乃「ごめんって」

イルカ「いいです」

亜乃「・・・」

イルカ「・・・」

亜乃「あと一時間半ぐらいであの人帰ってきちゃうけど最後になん

かやとくことない？」

イルカ「やとくこと？」

亜乃「うん。こうして君と話せたのもなんかの縁だから」

イルカ「そうですか・・・」

亜乃「逃がしてあげるのは無理だけどそれ以外だったらできる限り

ケアするよ」

イルカ「本当？」

亜乃「うん。できる限りだけ」

イルカ「じゃあ・・・でも」

亜乃「何？言って」

イルカ「最後に・・・お寿司、取ってくださいー！」

亜乃「お寿司？」

イルカ「大好きなんです。親からもらったこの身の終わり。食い納

めにお寿司で締めさせてほしいんです」

亜乃「(観客に)私は今夜のおかずの海豚のために特上寿司の出前を

取った。(イルカに) 出身は?」

イルカと亜乃、ビールの杯を交わす。

イルカ「沖繩っす」

亜乃「え? 日本なの? でも君ホッキョクヒメイルカだよね?」

イルカ「うちの親父とお袋、新婚旅行沖繩だったんす。あそこサン

ゴ礁きれいでしょ? だから親父とお袋盛り上がりっちゃって」

亜乃「じゃあハネムーンベイビーなんだ」

イルカ「そうです」

亜乃「名前は?」

イルカ「(以下、イルカ転じてプーチン) プーチンです」

亜乃「プーチン?」

プーチン「親父がオホーツク出身なんで。生まれは沖繩。育ちはオ

ホーツクです」

亜乃「へえグロヴアルだねえ」

プーチン「海に国境はないっすから」

亜乃「どこの海がきれいだった?」

プーチン「どこだろうなあ? まだ見てない海たくさんあるもんなあ」

亜乃「・・・」

プーチン「お願いがあるんです」

亜乃「え? なに?」

プーチン「死んだら僕、寿司になりたい」

亜乃「え?」

プーチン「タタキもいいんです。タタキもいいんですよ。でもどう

せ食べられるなら、あのまな板の上でキラキラ輝く寿司になりた

い。ダメですか?」

亜乃「(観客に) あの海豚特有の優しい瞳。私はダメとは言えなかつ

た。(プーチンに)わかったよ。プーチンはキラキラ輝く寿司にする」

プーチン「ありがとうございます」

亜乃「(観客に) そう言うとプーチンは突然立ち上がり」

プーチン、台所からお米の入ったお釜を出してきて、

プーチン「自分の寿司のシャリぐらい自分で研ぎますよ」

亜乃「(観客に) お米を研ぎ始めた」

プーチン「お米研ぐ時ってね。一番最初のお水はパツと捨てなきゃいけないの。こんな感じ。シャツシャツシャツと。一粒一粒さ、

丁寧に研ぐとき、水たくさん吸って、ふっくらとしたご飯に生き

たいなあ。生きたいなあ。ママ」

亜乃「なんとかする」

プーチン「え？」

亜乃「私がなんとか君を食べられないようにしてあげる」

プーチン「猫宮さん!!」

亜乃「(観客に) 夫が帰ってくるまであと30分。私はこのホッキョクヒメイルカいやプーチンを自分のクローゼットに隠した。そしてちょうど30分後彼が帰ってきて今こんな感じ」

亮平、登場。

第7場 マンション・猫宮家の部屋・夜

亮平「何か隠してる」

亜乃「隠してないよ」

亮平「どこだよ?」に隠した?俺のアレ」

亜乃「どこにも隠してないよ」

亮平「嘘をついても俺にはすぐわかるさ」

亮平、部屋全体の臭いを嗅ぎながら、歩き出す。

亮平「この部屋で隠せる場所なんて一つしかない」

亮平、クローゼットの引き戸を開ける。と、プーチンがそこから飛び出してくる。

プーチン「うおおお！」

亮平「何だよ、これ？」

亜乃「プーチン？」

プーチン「プーチン・ピチルブルクです」

亮平「なんで足があんだよ？」

亜乃「進化したの、ね？」

亮平「は？」

誤魔化そうとしてプーチン、歩きながら、亜乃と一緒に、『まんが日本昔ばなし』の歌「にんげんっていいな」(山口あかり・作詞、小林亜星・作曲)を歌う。

プーチン、歌に合わせて、でんぐり返しして、手を振って、出て行くこうとするが、怖い顔で亮平はそれを慌てて止める。

亮平「かわいいー！」

亜乃・プーチン「え？」

亮平「なんでこんなにかわいいんだよ！」

亜乃「やっぱりかわいいよね？」

亮平「かわいいよ。こいつ、飼わないか？」

亜乃「その日からプーチンは我が家の本当のペットになった」

第8場A スポーツジム

亮平、プーチン、退場。空間は、スポーツジムになる。亜乃が器具で身体を鍛えていると、井ノ口の声がする。

井ノ口の声「猫宮さんの奥さん」

亜乃「え？」

井ノ口、登場。

井ノ口「奇遇ですね。こんなところで会うなんて」

亜乃「あつ、井ノ口さん」

井ノ口「お一人ですか？」

亜乃「はい、今日は」

井ノ口「まあ見ればわかりますけどね」

亜乃「井ノ口さんもこの会員だったんですか？」

井ノ口「最近なっただんです。運動不足だから泳げる時に泳がないと。

僕、体動かさないとすぐ太る体質でしょ？で帰り道でしょ？」

いいとこ見つけちゃったな」

亜乃「そうだったんですか」

井ノ口「プールサイドから見えましたよ。奥さん、泳ぐのうまくな

いのね」

亜乃「実は水泳って得意じゃなくて」

井ノ口「猫宮さんは得意なの？」

亜乃「そうなんですか？」

井ノ口「知らないんですか？奥さんなのに」

亜乃「一緒に泳ぎに行ったことはあまりなくて」

井ノ口「(勝ち誇ったように)ふふふ。僕は社員旅行の時に見たんですけどね。まるで海豚みたいでしたよ。美しいと言っても過言じゃない。あれ、もうお帰りですか？」

亜乃「はい。今日はもう1000メートル泳いだんで。それじゃ」

井ノ口、亜乃の腕を掴む。

井ノ口「ちよつとちよつと、奥さん水臭い。つか(憎しみを込め

て)臭い」

亜乃「え？」

井ノ口「嘘、いい香りですよ」

亜乃「(距離をとりながら)井ノ口さんだっていい香りですよ？」

井ノ口「お世辞なら殺しちやいますよ」

間。

亜乃「冗談ですよね？」

井ノ口「冗談です。一緒に帰りましょうよ」

亜乃「はい」

気がつくと、井ノ口と亜乃、バスの車内にいる。

第8場B バス

井ノ口「ご主人痩せました？」

亜乃「え？痩せてないんじゃないかな？」

井ノ口「痩せましたよ。きつと3キロは軽くなったた。うらやましいなあ」

亜乃「別に井ノ口さんだって、やせてるっしやるじゃないですか？」

井ノ口「(冷たく) お世辞ですか？」

亜乃「お世辞じゃないですよ」

井ノ口「奥さんお世辞うまいからなあ。秘書課の関口さんも言っていましたよ。猫宮さんの奥さん、お世辞うますぎだって。最低の偽善者だって」

亜乃「本当にそう思ってますって」

井ノ口「(近づいて) 私、猫宮さんのボディシェイプが羨ましいんです。もつと痩せたいんですよ。軽くなりたいの。何か特別なもの食べさせてませんか？マイクロダイエット？それともコンニャク？」

亜乃「いや普通ですよ」

井ノ口「(冷たく) 教えたくないんですかね？」

亜乃「違いますよ。ほんとに普通なんです」

井ノ口「・・・(猜疑の視線)」

亜乃「そうだなあ。最近は野菜ばっか食べてます」

井ノ口「どんな野菜ですか？ちよっと待って当てる！モロヘイヤ？」

亜乃「普通の野菜です。キャベツとかレタスとかきゅうりとか人参」

井ノ口「肉とか魚とかは？」

亜乃「全く食べません」

井ノ口「嘘でしょ。あ嘘だ。僕先月、社食で猫宮さん見たよ。とんかつ定食食べてた。ええとね水曜日のね。12時8分。でしょ？」

亜乃「社食での夫を知ってることを気味悪がりながら(笑)実はあの人、

今月からベジタリアンになったんです」

プーチンの声「できましたー！」

エプロン姿のプーチン、お皿を二つ持って、登場。プーチン、
亜乃の前のテーブルにお皿を置く。井ノ口、退場。

第9場 回想・マンション・猫宮家の部屋・昼

プーチン「ビーフストログノフ！ビーフストログノフ！&パセリパ
セリパセリ。嗅いでみて」

亜乃「いい匂い」

プーチン「初めてにしちゃ良い出来です」

亜乃「亮平、ご飯だよ！」

亮平、登場。

亜乃「美味しそうですね？」

亮平「この匂いは牛？」

プーチン「ビーフストログノフは故郷の郷土料理なんです」

亜乃「プーチンに教わって、私が作ったの」

プーチン「今、僕の分のアジの開き、持ってきますから」

亜乃・亮平「いただきます」

プーチン、退場。亮平、スプーンで掬った肉を見つめ、

亮平「これ食べていいのかな？」

亜乃「え？どういう意味？」

亮平「だってこれ哺乳類だよ？」

亜乃「うん」

亮平「哺乳類って人間と家族だよ？」

亜乃「ん？なんで？」

プーチンの声。再び、『まんが日本昔ばなし』の歌「にんげん
っていいな」を口ずさみながら、登場。亮平、スプーンで掬
った肉とプーチンを比べる。

亮平「二足歩行だし」

プーチン「アジの開きです（と言って、椅子に座る）」

亜乃「この子だけよ」

亮平「言葉を喋る」

プーチン「あ、大根おろし、結構いい」

亜乃「この子だけだつて」

亮平「（プーチンに）ごめんな。家族だったのに食べて」

プーチン「え？」

亮平、プーチンを抱きしめる。

亮平「俺達は、もっとお互いを尊重し合わなきゃいけない。まして、
哺乳類同士食べ合うなんて愚かなこと」

プーチン、さっとアジのお皿を隠すが、亮平がお皿を奪って、

亮平「（プーチンに）魚もダメ。だって海生哺乳類と魚類は友達。お

前、友達食べたいの？」

プーチン「食べません」

亮平「食べるのは（パセリを手を取って）ベジ・食べる。名前だつ
てベジ・食べる。野菜こそ本当の食べ物だよ。よし。俺達は野菜
担当。お前は海藻担当。いいなっ」

亜乃「あのねえ、あなたがそうしたいならそうすればいいけどなん
で私達まで付き合わなきゃいけないわけ？」

プーチン「いつからですか？」

亜乃「ええ？」

亮平「もちろん今日からだよ」

プーチン「わかりました。楽しみですね亜乃さん」

亜乃「プーチンわかってる？」

プーチン「なにがですか？」

亜乃「あなたお刺身食べられないのよ」

プーチン「構いません。家族ですから」

亜乃「お寿司のネタも海藻よ」

プーチン「覚悟の上」

亜乃「シャリの上にワカメ一枚のってるだけよ。いいの？」

プーチン「一家の長がそうしたいなら僕は従うまで」

亮平「亜乃、君もだよ」

亜乃「キュー」

井ノ口「じゃあそろそろ一ヶ月ですか？」

亮平、プーチン、退場。井ノ口、登場。

第10場 バス停

亜乃「はい」

井ノ口「肉、懐かしいんじゃないですか？」

亜乃「そんなことないです」

井ノ口「食へに行きませんか？肉？」

亜乃「井ノ口さん、ダイエットしてるんじゃないの？」

井ノ口「大丈夫。今日は5000メートル泳いだんですよ？それに、

得意技あるから。技っていうか芸？私ね、食べ過ぎても吐けるんですよ。ニコっやって喉に指突っ込んで、いくらでも吐けますから」

亜乃「そこまでしなくてもいいのに」

井ノ口「奥さんと肉食べたくなってきたんですよ。肉。いい焼肉屋あるんですよ。とつても若い肉が多い。もう肌なんかプリンプリンしちゃって。しかも一時間5000円から」

亜乃「それ焼肉屋なんですか？」

井ノ口「焼肉屋ですよ。特別な焼肉屋」

亜乃「でも肉食べたって主人にバレると後でコトなんで」

井ノ口「なんでバレる？」

亜乃「それは」

井ノ口「私が言うとも？」

亜乃「そういうわけじゃ・・・(ないんです)」

井ノ口「(遮って) 行きましようよ。ね、行きましよう」

井ノ口、じっと亜乃を見る。

亜乃「行きましよう」

井ノ口「それじゃ、ご案内します」

すると、空間は黒毛和牛専門店に変わる。

第11場A 黒毛和牛専門店

タキシード姿の蘇我野がテーブルのセッティング等をしている。そこへ井ノ口と亜乃が店の入り口から入ってくる。

蘇我野「いらっしやいませーあれ井ノ口さん。いつもありがとうございます」

「ございます」

井ノ口「今日はメスと二人。ふふふ」

亜乃「メスって」

蘇我野「なかなかメスですね」

亜乃「だからメスって、え？あれ、あなた」

井ノ口「お知り合いですか？」

亜乃「どこかでお会いしませんでしたっけ？」

蘇我野「いいえ、初めてです」

亜乃「でもどこかでお会いした気が」

蘇我野「いいえ、初めてです。さあお席はこちらです」

井ノ口、亜乃、席に座る。蘇我野、亜乃の後ろにくつつき、

蘇我野「本日は何にいたしましたしょう？」

井ノ口「いつものコースで。それとザブトン入ってます？」

蘇我野「もちろん、」

井ノ口「じゃあオプショナルでザブトンつけてもらって。とりあえず、それで」

蘇我野「(亜乃に)美味しそうな耳。(井ノ口に)かしこまりました」

蘇我野、退場。(会話中に再び)蘇我野、登場。

亜乃「よく来るんですか？この店」

井ノ口「うまい肉食べたくなった時は必ずですね」

蘇我野「失礼します。肩コースで」

井ノ口「肩コース」

蘇我野「はじめ！」

井ノ口、すごい勢いで食べる。食べ終わる。

蘇我野 「リブローズでございます」

井ノ口 「リブローズ」

蘇我野 「はじめ！」

井ノ口、すごい勢いで食べる。食べ終わる。

蘇我野 「カルビステーキでございませす」

井ノ口 「カルビステーキ」

蘇我野 「消灯！（暗転、音楽IN）」

亜乃 「え？」

蘇我野 「はじめ！」

暗闇の中。

井ノ口 「奥さんも食べないと」

亜乃 「何も見えません」

井ノ口 「だからいいんですよ。目を殺して舌と耳で味わうんです」

亜乃 「お皿はどこ？」

井ノ口 「ここですよ」

蘇我野が井ノ口の皿の上のステーキを切る。すると、ヴァイオリンの音がする。井ノ口もナイフをヴァイオリンの弓を弾くように切ると、音楽「ラ・クンパルシータ」IN 店員達、左手にお皿、右手にナイフを持ち、ヴァイオリンの音を奏で始める。さらに、店員の何人かは、お店の椅子で、タンゴを踊り始める。やがて、食の狂騒はおさまっていく。

亜乃「あのう、ザブトンってなんですか？」

井ノ口「牛の肩ロースの下の肉です。牛肉の中でも霜降りが一番入ってる部位です」

亜乃「おいしいんですか？」

井ノ口「舌が泳ぎます。それも平泳ぎで」

亜乃「平泳ぎ？」

井ノ口「そう平泳ぎ。あんな味ここでしか食べられない」

亜乃「ここでしか食べられないものって他にもあるんですか？」

井ノ口「仔牛の脳味噌」

亜乃「えー！」

井ノ口「生後6ヶ月で殺した仔牛の脳味噌なんですけどね。食べて

みるとすごいんですよ。噛んだ瞬間、牛の殺される間際の記憶が、

キュルル（つばの音を立て）と奥歯から染みてくるんです。しか

もノンカロリー」

亜乃「脳味噌って特定危険部位でしょ？」

井ノ口「そこがたまらないでしょ？」

亜乃「帰ろうかな」

井ノ口「大丈夫ですよ。和牛ですから。全頭検査してますから」

亜乃「でもリスクはあるでしょ？」

井ノ口「うまいもんにリスクはあるのは当然だろうがよ！」

亜乃「・・・」

井ノ口「狂牛病ってなんで起きたか知ってます？」

亜乃「なんでですか？」

井ノ口「肉牛の成長を速めるために栄養価の高い牛の骨と内臓、餌に混ぜたんです。肉骨粉ね。そしたら狂牛病になっちゃった。そ

りやあ牛に牛食べさせるんですから病気にもなりますよ」

亜乃「・・・」

井ノ口「でも肉骨粉うまかったんだろうなあ」

亜乃「私はリスクを負ってまで脳味噌食べたくないなあ」

井ノ口「食べたことないからそう思うんですよ」

亜乃「そうかなあ」

井ノ口「頼みます?」

亜乃「いや、いいですよ」

井ノ口「ねえ、見てください。あそこ」

亜乃「え?」

ダサイハット帽をかぶったイルカが、蘇我野に、席まで案内されている。人目を忍んで来たといった様子。

亜乃「(観客に)驚いた。振り向くとそこには明らかに変装に失敗し

たプーチンがいた」

蘇我野「(登場して)いらっしやいませ」

井ノ口「なんで海豚がいるんだろ?」

亜乃「あれえ、海豚ですかね?」

井ノ口「海豚にしか見えなけれど」

亜乃「でもここは焼肉屋ですよ?焼肉屋に海豚なんていますかね

え?」

蘇我野「こちらでございます」

プーチン「尻尾が邪魔なんで立って食べれる席あります?」

蘇我野「申し訳ございません。当店はテーブル席のみになっております」

プーチン「わかりました」

井ノ口「尻尾があります。間違いなく海豚だ」

亜乃「でもこんな静かな町の中の焼肉屋に海豚なんていますかね

え?」

プーチン「あほう」

蘇我野「はい」

プーチン「緒で持てる箸ください」

蘇我野「かしこまりました」

蘇我野、退場。

井ノ口「海豚ですね」

亜乃「でも海豚にしては変な帽子被ってるし」

井ノ口、席を立って、

井ノ口「すみません」

プーチン「はい。なんでしょう？」

井ノ口「もしかして、海豚じゃないですか？」

プーチン「違いますよ」

井ノ口「帽子取ってください」

プーチン「え？」

井ノ口「食事の時に帽子は取る。マナーだろうがよ！」

プーチン、帽子を取る。

井ノ口「(亜乃に) やっぱ、海豚ですよ。奥さん」

プーチン「え？」

プーチンと亜乃、見つめ合う。亜乃、立ち上がり、

亜乃「どうやって部屋から出た？」

プーチン、合鍵を出す。

プーチン「りょうちゃんがちょっと外に出かけた隙に」

亜乃、プーチンから合鍵を奪う。

亜乃「それで何やってんの？」「こ」で

プーチン「いいじゃん別に」

亜乃「は？」

プーチン「いろいろあるんですよ」

亜乃「何隠してんの、言いなさい」

プーチン「ちよっと食べてみようかなって思ったただだよ。牛。美

味しいんでしょ？どんな味がすんのかなって」

亜乃「合わないよ」

プーチン「え？」

亜乃「口に合わない。刺身と違って生の食感ないし」

プーチン「美味しいからって独り占めする気？」

亜乃「海豚が食べるもんじゃないの」

プーチン「一回きりだよ」

亜乃「うち肉禁止だよね？」

プーチン「でもママは食べに来たんでしょ？」

亜乃「ちよっと待って、マママ？」

プーチン「は？ママはママでしょ？」

亜乃「なんでマママ？」

プーチン「りょうちゃんが言っていました。僕達家族だって」

間。

亜乃「呼ばないで」

プーチン「え？」

亜乃「ママって呼ばない」

プーチン「なんで？」

亜乃「なんででも！」

プーチン「でもママなのに」

亜乃「ママじゃない！」

井ノ口、亜乃を押さえる。

井ノ口「どうい関係なんですか？」

プーチン「プーチンとママは家族であります」

亜乃「うちで飼ってるペットです」

プーチン「(抱きつく) ママ！」

亜乃「突き放して) やめてよ！」

プーチン「僕達家族じゃないの？」

亜乃「そういうことじゃない！」

井ノ口「へえ、猫宮さんとこ海豚飼ってたんだ？」

亜乃「主人の趣味ですよ」

井ノ口「美味しいんですか？」

プーチン「え？」

亜乃「ペットですよ」

井ノ口「え？猫宮さんちってペット食べないの？」

亜乃「え？井ノ口さんちってペット食べるの？」

井ノ口「・・・」

亜乃「・・・」

プーチン「キュー」

井ノ口「食べませんよ」

亜乃「嘘だ」

井ノ口「食べません」

蘇我野、登場。

蘇我野「お待たせしました。ザブトンで」
「ございます」

プーチン「これが牛のザブトン？」

井ノ口、自分の席につく。亜乃、それに続く。

亜乃「お前は食べちゃダメだから」

井ノ口「海豚くん」

プーチン「はい」

井ノ口「食べなさい」

亜乃「井ノ口さん！」

井ノ口「私のおごりです」

プーチン「いただきます」

プーチン、ザブトンを口に運ぶ。音楽「時間よ止まれ」IN
途端に、口の中にその濃厚な味が広がっていき、レストラン
は海の中になる。プーチン、重力を失い泳ぎ始める。

井ノ口「どうした？海豚くん」

プーチン「なんて言ったらいいんでしょうか？舌が、舌が泳ぐんで
す」

プーチンの笑顔。プーチンの食べる音。

プーチン「こんなに身が軽くなったの。水槽を出てから初めてです」
井ノ口「いいぞ。この軽さをもっと楽しむんだ」

プーチン「まるで海に戻ったみたい」

井ノ口「ふふふ(亜乃に)見てごらん。こんなに美味しそうだよ。

動物ってね、うまいもん食べてる時の顔と自分が食べられてる時の顔は一緒なんだ(プーチンに重力が戻ってくる)「

亜乃「え？」

井ノ口「失礼」

井ノ口、亜乃を齧る。亜乃、すごい形相になる。

亜乃「イタツって、何するんですか？」

井ノ口「ほらこんな感じ。奥さんもうまいもん食べてる時って今のその顔してんだよ」

蘇我野、登場。

蘇我野「どうぞ」

井ノ口「失礼します」

亜乃、手鏡を受け取り、自分の顔を見る。井ノ口、もう一度、亜乃を齧る。

亜乃「イタツ・・・(観客に)たしかにそこには私のうまいもん食べてる時の顔があった。横を向けばプーチンの食べられてる時の顔があった」

プーチン「おかわり!」

亜乃「(観客に) 私達は牛のザブトンをもう一皿頼んだ。実に美味かった。プーチンは調子に乗ってザブトンに合うワインをたらふく飲んでグデングデンになった。時間は夜の12時。気がつくとも井ノ口は勝手に勘定を済ませいつの間にか消えていた。私はプーチンと二人でタクシーで帰宅した」

井ノ口、蘇我野、退場。

第12場 帰り道

プーチン、『まんが日本昔ばなし』の歌「にんげんっていいな」を口ずさんでいる。

亜乃「なんで逃げなかったの？」

プーチン「(酔っ払って) なんで？」

亜乃「海に逃げられたでしょ？」

プーチン「僕はママだと思ってるから亜乃さんのこと」

亜乃「・・・」

プーチン「亜乃さんにとってはただのペットなんですよ？」

亜乃「家族よ」

プーチン「嘘だ」

亜乃「家族よ。今はね。でもまた食べるかもしれない」

プーチン「やっぱり食べる気なの？」

亜乃「そんなのどうなるかわからないもん」

プーチン「最低！」

亜乃「タラレバの話だから」

プーチン「内臓まで食べるの？」

亜乃「そのレバーじゃない！」

間。

プーチン「さっきも行ったんです。海までは」

亜乃「え？」

プーチン「水の中にも入った」

亜乃「じゃあなんで逃げなかったの？」

プーチン「重くて泳げなくなってたんです」

古小町の声「お仕事お疲れ様です」

管理人の古小町、大きなゴミ袋を持って、登場。

第13場 マンションのオートロックのロビー・夜

亜乃「あ、ちょっと友人と飲んでて。それで遅くなっちゃいました。それより真夜中なのにお掃除ですか？精が出ますね」

古小町「掃除じゃないわ。ごみチエックよ」

亜乃「ごみチエック？」

古小町「これね909号室の徳武さんがさっき出したゴミ」

古小町、ゴミ袋の中から空き缶を出して、

古小町「丁寧にラベルはがしてるけど猫用の缶詰め。これもこれもこれも」

亜乃「ほんとだ、たくさん」

古小町「プラスチックにアルミ缶、バラエティーに富んでいらつしやる。徳武さんちの猫ってグルメなのね。きつと高いのよ、私がマヨネーズつけて食べてるツナ缶よりきつと高いの、羨ましいわ」

あ、お刺身のトレイ！猫にお刺身食べさせてる！」

亜乃「……」

古小町「(「)ミ袋を閉じて) 本当はこんなことしたくなかったの。でも私、管理人ですから。管理するだけしかできませんから」

亜乃「いつもご苦勞様です。それじゃ(亜乃、プーチンをさっと自分の部屋に放り込み、出てくる)」

古小町「猫宮さん！」

亜乃「はい」

古小町「そういえば猫宮さんの部屋からペットの鳴き声が聞こえたって話を聞いたけど本当？」

亜乃「まさか」

古小町「そう、まさかね、ふふふ」

亜乃「ああもしかして最近飼い始めた飼い熱帯魚のことかな？」

古小町「へえ、猫宮さんちの熱帯魚って鳴くんだけ？」

プーチン「(寝ほけて) キュー！」

亜乃「うちの熱帯魚、鳴くんですよ」

古小町「どんな熱帯魚かしら？」

亜乃「熱帯魚ショップで買えるオホーツク産の普通の熱帯魚です」

プーチン「(寝ほけて) キュー！」

亜乃「ちょっと鳴くってことだけが特徴の」

古小町「わかっていると思いますけどうちのマンションではペットは

禁止ですからね」

亜乃「金魚や熱帯魚などの水槽で飼えるものは除いて、ですよね」

古小町「もちろん。でもあなたのところは前科があるから」

亜乃「マー君のことを言ってるっしやるんですね？」

古小町「あの子猫、マー君って名前だったんだ」

亜乃「はい」

古小町「マンションにはマンションのルールがあるんです。それを

破ったらどうなるかは「存知ですよ、ね？」

亜乃「もちろんです」

古小町「来週の水道管全室検査の日が楽しみです、それじゃ」

古小町、去りかけるが、

亜乃「あのう、管理人さん」

古小町「なんででしょう？」

亜乃「例えばの話ですけどもし水槽で飼わずにすむ熱帯魚がいたらそれも飼うの禁止ですかね？」

古小町「水の中にいない魚は魚じゃないわ」

亜乃「そうですね。ああ、よかった。うちの熱帯魚が水の中にいるタイプで」

亮平の声「泳げなくなっただってどういうこと？」

管理人、退場。プーチンと、通勤姿で鞆を持った亮平、登場。

第14場 マンション・猫宮家の部屋・朝（翌朝）

亜乃「（プーチンに）どういうこと？」

プーチン「まんまです。泳げなくなっちゃった」

亮平「海豚なのに？」

プーチン「はい。水の中に入るとああああ」

亮平「じゃあ、水槽にも入れないの？」

プーチン「水槽なんて（水槽に近づく）あああああ、鮫肌立っちゃう。ほら（亮平に鮫肌を見せる）。顔洗うのだったってやっとなぐらい

なんですから」

亮平「（亜乃に）なんで朝の出勤前に言っただよ」

亜乃「だって、昨日、あなた寝てたから」

亮平「そりゃあ、寝るよ。朝、早いんだから」

亜乃「起こしたら起こしたで怒るじゃん」

亮平「怒らないよー」

亜乃「ほら怒ってるー」

亮平「どうすんだよ」

亜乃「どうするって？」

亮平「泳げなかったらどう見てもペットだろう？」

亜乃「たとえ泳げたとしてもマンションで海豚飼ってたからバレ

たらやばいって」

プーチン「(大きな声で) バレたらどうなるんですかー」

亜乃「大丈夫だよ。あなたは安心してて」

プーチン「(大きな声で) 嘘だー本当のこと教えてよー」

亜乃「(プーチンにだけ小声で) マー君の時は即保健所に送られた」

プーチン「即保健所」

亜乃「・・・」

プーチン「保健所」

亜乃「たとえば水道管全室検査の日だけ家の外で時間つぶしても

らう？」

亮平「この部屋の外へ出すの？」

亜乃「ちよっとの時間だけね」

亮平「(小声で) 逃げるよ」

亜乃「(小声で) 逃げないよ」

亮平「逃げる」

亜乃「逃げる気だったらもう逃げてる」

間。

亮平「なんで泳げなくなっただんどう？」

亜乃「魚を食べさせてないからじゃない？」

亮平「そんなことないよな、プーチン」

プーチン「保健所」

亜乃、プーチンの匂いを嗅ぐ。異変に気づく。

亜乃「え？」

亜乃、もう一度、プーチンの匂いを嗅ぐ。

亮平「どうした？」

亜乃「臭いが」

亮平「臭い？」

亜乃「プーチンのあの海豚の臭いじゃなくなってる」

亮平「じゃあ何の臭い？」

亜乃「これ獣じゃない」

亜乃、臭いを嗅ぐ。

亜乃「人間の臭い？」

亮平「は？」

亜乃「ほらこれ人間の臭いよ。満員電車の中でどこからともなく漂ってくる」

亮平も臭いを嗅ぐ。

亮平「埼京線だ。亜乃、プーチンから埼京線の臭いが」

亜乃「ちょっと待って」

亜乃、亮平の臭いを嗅ぐ。

亜乃「りょうちゃん」

亮平「なんだよ？」

亜乃「いつから？」

亮平「はい？」

亜乃「いつからなの？」

亮平「いつからって？」

亜乃「(遮るように) 海豚臭いのよ」

亮平「は？」

亜乃「海豚臭いの」

プーチン、亮平の臭いを嗅ぐ。

プーチン「ほんとだ。海豚臭」

亮平「嘘だ」

亜乃「本当よ。海と潮の香り、海豚臭」

プーチン「間違いない」

亮平「なんで俺が海豚臭いんだよ？」

亜乃「もしかしてプーチンが少しずつ人間になってる代わりにりよ

うちゃんが・・・」

亮平「なんだよ」

亜乃「少しずつ海豚になってるのかも」

亮平「ちょっと待ってくれよ。まさかそんなことあるわけないだ

ろ？」

プーチン「キュー」

亮平「(つい反応して) そんなイルカ語で話しかけてもキューって、え？」

プーチン「キューキューキューキュー」

亮平「そんなこと言ったってキューキューキューキューキュー、違

うんだよ」

プーチン「キューキューキューキュー、キューキュー」

亮平「キッキューキッキュー、キッキュツキュー、やめろよ！」

医者1の声「今日は、どうしたの？」

医者1、登場。プーチン、亜乃、退場。

第15場A 病院A (小さな個人医院)

亮平「はい、最近、頭痛とめまいと・・・臭いがひどくて」

医者1「臭い？」

亮平「私、海豚臭いんです」

医者1「ちよっと息吐いてもらっていい？」

亮平、息を吐く。

医者1「もう一回いい？」

亮平、息を吐く。

医者1「ああ、ああ。これね」

亮平「(焦って聞く) 何なんですか？」

医者1「これ、海豚病」

亮平「海豚病？」

医者1 「安心した?」

亮平 「ちょっとは」

医者1 「病名がわかるとどんな病気でも安心できるのなんだろうね?でも珍しいよ。後天性異進化形成海豚病」

亮平 「ゆっくりと」 大病なんですか?」

医者1 「いや、鯛じゃなくて海豚ね」

亮平 「いやそうじゃなくて重い病気なんですか?」

医者1 「重くないよ。軽いよ。だって海豚になれるわけだから。軽い。軽い。水の中で浮ける。ちょっと服脱いでもらっていい?」

亮平、服を脱いで、上半身裸になる。

医者1 「右手の甲見せて」

亮平、右手を見せる。

医者1 「左手も」

亮平、左手を見せる。

医者1 「で、胸に。ピツとつけて脇閉める」

亮平、両脇を締める。

医者1 「手首を上下に動かしてみて」

亮平、手首を上下に動かす。

医者1「(手首の上下の動きに合わせて) そうやって海豚は泳ぐんだ
よ」

医者2の声「なんてふざけた医者だ。医者風の風上にもおけない」

医学の理想に燃える医者2、登場。

第15場B 病院B (大学病院)

医者2「猫宮さん、おかけください」

亮平、座る。

医者2「後天性異進化形成海豚病は症例が非常に少ないこともあってまだ研究が進んでない。(喋っている途中で、亮平の前に座わろうとするが、その臭いに慌てて席を立つ) 現代医学にとって未知の奇病なんです。彼がそんな態度を取ったのも医者の中にある潜在的な偏見が顕在化したということかもしれません。恥ずべきことですよ！」

亮平「あのう」

亮平、医者2に近づこうとするが、距離を取られる。

亮平「先生」

亮平、医者2に近づこうとするが、距離を取られる。

亮平「症状は海豚になっていくだけですか？」

医者2「そうです。ただまだ研究は進んでないので詳しいことはわ

からないんです」

亮平「どれくらい速さで海豚なっていくんですか？」

医者2「さわるな！（看護婦に）消毒。消毒！」

医者2、看護婦に亮平にさわられた手を消毒してもらった。

医者2「そうだったこともまだわからないんです」

亮平「わかっていることはないんですか？」

亮平、医者2に近づこうとするが、距離を取られる。医者2、
ゴム手袋をはめ、マスクをつけながら、

医者2「とにかくどんな病気でも時間をかければ必ず治すことができます」

医者2、握手を求める。

医者2「我が病院に入院して一緒に治していきませんか？」
井ノ口の声「最初から僕に相談してくれればいいのに」

医者2、退場。お玉を持った井ノ口、登場。

第16場 五右衛門風呂

亮平、お風呂に入ってる。

亮平「だって井ノ口さん会社の同僚だしこんなこと相談するなんて
悪いかなあと思って」

井ノ口「水臭い。つーか（愛を込めて）臭い。最近何食べました？」

亮平「野菜です。キャベツとかレタスとかきゅうりとか人参とか」

井ノ口「モロヘイヤは？」

亮平「まだ食べてないです」

井ノ口「お酒とかは飲んでないですか？」

亮平「ビールとかを少々」

井ノ口「ちよっと飲みますよ」

井ノ口、亮平の浸かっているお湯をお玉ですくって飲む。

井ノ口「たしかにダシとれてる」

亮平「まじですか？」

井ノ口「海豚風味。飲んでみます？」

井ノ口、お玉を亮平に渡す。亮平、自分が浸かっているお湯をお玉ですくって飲む。

井ノ口「どうです？」

亮平「これが俺味のダシ？」

井ノ口「たしか沼津で食べた海豚のお吸物ってこんな味だったかな」

亮平「ふざけんな！」

亮平、お玉を投げつける。

井ノ口「私に怒ってもしょうがないじゃないですか？」

亮平「この怒り誰にぶつけりゃいいんですか？」

井ノ口「怒りはぶつけちゃいけません。自分の中で抱きしめるんです。それが大人です」

井ノ口、そつと亮平を抱きしめるが、

亮平「井ノ口さん今日距離近くない？」

井ノ口「ミントに似てる」

亮平「ミント？」

井ノ口「我が家のワンコ。そっくりなんですよ。毛の色とか黒目勝ちの瞳とか。その香りとか」

亮平「井ノ口さん、なんか目つき変わってませんか？」

井ノ口「猫宮さん」

亮平「はい」

井ノ口「ミント死んじゃったんです。三年前に。僕悲しくて」

亮平「そうなんですか？すみません」

井ノ口「なんでミント死んじゃったんだろう？」

亮平「・・・」

井ノ口「僕が味噌で煮込んだからかな？」

亮平「え？」

井ノ口「どうしました？」

亮平「まさか俺を食べる気じゃないですよね？」

井ノ口「・・・」

亮平「俺美味しくないですよ」

井ノ口「ミントもねキャンキャン、キャンキャン、そう言ってますた。でも、そんなの食べてみなぎやわかんないじゃないですか？

(井ノ口、亮平の身体に塩と胡椒を塗り込む)

亮平「助けて」

井ノ口「命は助け合って生きてるんです。ね、ミント」と言ってお腹をさする(」

亮平「井ノ口さん、それよくない」

井ノ口「なんでペット食べたんだと思います?」

亮平「ペット食べたの?」

井ノ口「はい。食べてますよ、そりゃあ。でもね、なんで食べ始め
たんだと思います?」

亮平「かわいくなくなっちゃったから?」

井ノ口「違う!」

亮平「愛してたから?かわいすぎて?」

井ノ口「アタリ。愛してるものって食べたことがなかったから。好

奇心?私、グルメだから」

亮平「・・・」

井ノ口「他に愛してるものってなんだろう?」

亮平「そんなの正しくない」

井ノ口「正しいか正しくないかじゃないんですよ。何を選ぶかです」

亮平「やっぱり俺も食べるんですか?」

井ノ口「ごめんなさい。でも無駄にはしませんから。ちゃんと栄養

にしますから、ね」

亮平「・・・」

井ノ口「いただきます!」

亮平「やめろ!」

井ノ口「やめません」

亮平「明らかにおかしい。考え直してよ」

井ノ口「何もおかしくない」

亮平「いや!やめて!お願い!」

井ノ口「ごめんね、猫宮さん」

亮平「匂じゃない」

井ノ口「は?」

亮平「今俺は匂じゃない!」

井ノ口「それで?」

亮平「秋に鱈食います？春に秋刀魚食います？それと一緒に。この時期に旬じゃない俺を食うなんてそんなのグルメのすることじゃない。邪道ですよ」

井ノ口「猫宮さんはいつが旬なの？」

亮平「四月！食欲の秋にもりもりと食って、寒さに備えて皮下に脂肪をたっぷり蓄える。その脂肪が肉に充分サシてきて成熟する、

桜の咲く頃が旬ですから。まだ六ヶ月ありますから」

井ノ口「絶対美味しくなる？」

亮平「なりません」

井ノ口「ならなかったら？」

亮平「え？」

井ノ口「今食べちゃうぞ」

亮平「なりませんから！」

井ノ口「じゃあ待ちますか」

井ノ口、退場。プーチン、ネクタイを締めながら登場。

第17場A マンション・猫宮家の部屋・昼

亮平「ただいま」

プーチン「あ、おかえりなさい！」

亮平「亜乃は？」

プーチン「もう仕事行きましたよ」

亮平「そう」

プーチン「で、どうでした？病院」

亮平「心配ないみたい。食べすぎで胃がもたれてて、それでクサイらしくって」

プーチン「よかったあ。大したことなくて。僕、もう行きますから、

あ、よかったら、お鍋のお味噌汁飲んでください」

プーチン、出て行くこうとする。

亮平「ちょっと待って」

プーチン「え？」

亮平「どこ行くの？」

プーチン「仕事です」

亮平「何の仕事？」

プーチン「何のって、りょうちゃんの仕事ですよ？」

亮平「りょうちゃん？」

プーチン「はい、りょうちゃん」

亮平「お前が行くの？俺の仕事」

プーチン「働かざるもの食うべからず」

亮平「でも、俺の仕事だろ？」

プーチン「その身体で仕事行けますか？働けますか？」

プーチン、出て行くこうとする。

亮平「ちょっと待てよ。まずいだろ、さすがに」

プーチン「何が？」

亮平「会社の人、驚くだろ？」

プーチン「遅刻のことなら大丈夫。半休取るって、連絡しておいたから」

亮平「いやいやそうじゃなくてさ」

プーチン「第一うちの会社フレックスじゃん」

亮平「なんでお前が行かなきゃいけないんだよ」

プーチン「もうすぐ決算だし、仕事たまってるもん」

亮平「お前、海豚だろ？」

二人「ははは」

プーチン「(笑って) りょうちゃんだって海豚じゃん」

亮平「は？」

プーチン「僕のほうがちょっとりょうちゃんぽくなってきたから。

代わりに稼いできますよ」

亮平「仕事わかるの？」

プーチン「わかりますよ。りょうちゃんの仕事ぐらい」

亮平「でも、俺の仕事だから、俺が行くよ」

プーチン「鏡見て。今仕事できる身体じゃないよ」

亮平、鏡で自分の姿を見る。すると、スポット照明が亮平を照らす。いつの間にか、手が海豚の鰭になっている。

プーチン「りょうちゃん、その手でどうやってタイピングする？ど

うやって、マウス持つ？」

亮平「そんなのお前だって一緒だろ？」

プーチン、既に人間になった手の平を見せる。

プーチン「僕、もうエクセルもワードも使えるよ」

亮平「・・・」

プーチン「亜乃さん、何時に帰ってくる？」

亮平「7時ぐらいかなってそうじゃなくて」

プーチン「それまで一人ぼっちだけ大丈夫？」

亮平「大丈夫だと思うけど、そうじゃなくて」

プーチン「鳴き声出しちゃダメよ。管理人さん、うるさいから」

古小町の声「すみません」

トントンと音がする。

プーチン「あら、来ちゃったよ」

プーチン、玄関へ行き、古小町を連れて、すぐ戻ってくる。

プーチン「どうぞどうぞ（水道を示し）こっちです」

亮平「どうぞどうぞ（水道を示し）こっちです」

プーチン「じゃあお願いします」

亮平「じゃあお願いします」

古小町「いる」

プーチン「何が？」

亮平「何が？」

古小町「ペット」

亮平「こいつはペットじゃなくて」

プーチン「どこにいるの？」

古小町「隣りにいる。喋ってる」

プーチン「え？何言ってるんですか？」

亮平「プーチン、逃げろ！」

古小町、亮平の頭を掴む。

古小町「これよ、これ」

亮平「え、俺？」

古小町「あなたが外に出たがるおちゃかなさん？」

プーチン「彼？」

古小町「そう、これ」

プーチン「いやいや、これペットじゃないっすよ。」

亮平「ちよっと待ってっ」

古小町「え？これがペットじゃない？」

プーチン「ペットじゃないよ。りようちゃんでしょ？ねえ？」

亮平「りようちゃんです。いや、猫宮です」

古小町「……(笑う)」

プーチン・亮平「……(笑う)」

古小町「それじゃ」

古小町、亮平を連れて行くとする。

プーチン「やめろよ」

管理人「どきなさい」

プーチン「連れて行くんなら、彼がペットであることを証明してみろよ」

管理人「首輪がついてる」

プーチン「ネクタイでしょ、それ」

管理人「ん？何？この獣臭？」

プーチン「加齢臭ですよ」

管理人「この体毛は？」

プーチン「え？髪の毛ですよ」

管理人「鳴くでしょ？この子鳴くでしょ？私、夜鳴きするペットが耐えられないの」

プーチン「りようちゃんは鳴かないよ、ねえ」

亮平「俺、鳴かない」

プーチン「ほら、他には？」

管理人「他には……ないわよ」

プーチン「だったら、連れてはいかせられないね」

管理人「マンションのルールを破る気？」

プーチン「だから破ってないでしょ？この部屋には最初からペットはいないんです」

管理人「もし泣き出したらすぐにでも連れて行きますからね」

古小町、退場。

プーチン「ペットがペットである証明なんてできるわけないじゃん。ねえ」

亮平「ありがとう」

プーチン「言っとくけどこんなのりょうちゃんが僕にしてくれたこと比べれば大したことないから」

亮平「俺なんかしたっけ？」

プーチン「僕のこと飼ってくれたじゃん。ペットにしてくれたじゃん」

亮平「ああ、あれ」

プーチン「すごいことだよ。普通できないよ。僕、生きてる限りあんたをリスペクトするから。助け続けるから。じゃあ行くね」

プーチン、退場しかけると、

亮平「どこ行くの？」

プーチン「さっきも言ったじゃん。仕事」

亮平「だからなんでお前が行くの？」

プーチン「だってりょうちゃんが行ったら、みんなドン引きだよ。僕が代わりに行ってくるよ」

亮平「俺が行くよ」

プーチン「ダメだよ」

亮平「行きたいんだよ」

プーチン「ダメだって」

亮平「(土下座して) 行かせてよ」

プーチン「今、りょうちゃん、病気なんだよ。家で寝てなきやダメだよ」

亮平「今、寝ちゃったら二度と治らない気がするんだ」

プーチン「そしたら、僕が一生食わしてやるって」

亮平「お前に一生食わしてもらいたくないよ」

プーチン「何言ってるんだよ。一日中家の中でこうやってボーっとできるとだよ。すげえ自由じゃん」

亮平「そんなの自由じゃない」

プーチン「とにかく僕か亜乃が帰ってくるまで安静にしててよ」

亮平、一人残され、イルカのように腕をヒラヒラとさせ、ボ
ーっとしてしまふ。しばらくして、

亜乃の声「どうしてこうなっちゃったんだろう？」

亜乃、登場。プーチン、退場。

第17場B マンション・猫宮家の部屋・夕方

亮平「君が最初に海豚食べろって言ったからだ」

亜乃「大好物で食べてたの、りょうちゃんでしょ？」

亮平「一緒に食べたのに、なんで俺だけ海豚なんだよ！」

亜乃「それって私も海豚になって欲しいってこと？」

亮平「ああ、なって欲しいね！」

亜乃「りょうちゃん、それひどくない？」

亮平「りようちゃんって呼ぶのやめろ！」

亜乃「大きな声出さないでよ！」

息を整えるが、冷静になれない亮平。

亮平「亜乃、助けてよ！」

亜乃「落ち着いて。落ち着けばいい方法見つかるから」

亮平「人間に戻りたい」

亜乃「今も人間よ」

亮平「どこが？この臭いのどこが人間？」

亜乃「私、今のちよつとクサイあなたも好きよ」

亮平「俺は今の俺好きじゃない。仕事にも戻りたい。ちゃんとした人間に戻りたい。なんとか」

亮平の言葉を遮り、亜乃、亮平を胸で抱きしめる。

亜乃「冷静に考えましょっ」

亮平「俺は海豚食って海豚になったんだ」

亜乃「そうね」

亮平「じゃあ人間に戻るには」

亜乃「戻るには？」

亮平「人間食べるしかないんじゃないか？」

亜乃「また冗談言って」

亮平「食べないでどうすんだよ、これから？」

亜乃「食べるって誰を？」

亮平「お前？」

亜乃「私？」

亮平「他にいる？」

亮平、亜乃を狂気の瞳で見つめる。亜乃、動揺するがやがて、

亜乃「いいよ。あなたが元に戻るなら」

亮平「冷静になって」冗談だよ？冗談。でも」

亜乃「・・・」

亮平「誰か食べないとずっとこのままかもしれない」と言って、既に繕になってしまった、自分の手を見る」

亜乃「・・・」

亮平「誰、食べる？」

亜乃「井ノ口さんとか」

亮平「・・・」

亜乃「何言ってるんだろ？私」

亮平「しょうがないか」

亜乃「え？」

亮平「しょうがないよ。俺食べられかけたんだから？目には目を齒には齒を。それに人間が人間を食べるのは問題かもしれないけど、

海豚が人間を食べるならまだ許される」

亜乃「許されるって誰に？」

亮平「人間にだよ。たまにいるだろ？動物園のライオンに襲われちゃう、かわいそうな人。でもかわいそうで済まされる・・・井ノ

口さん、食べても俺と夫婦でいてくれる？」

亜乃「当たり前でしょ？」

亮平「ああ、俺今、ベジタリアンだった」

亜乃「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ？」

亮平「ふふふ、いつ食べる？」

亜乃「なんでそんなに乗り気なのよ？」

亮平「乗り気に見える？」

亜乃「見えるよ」

亮平「こんなに浮かれてるの、いつ以来だろ？」

亜乃「ハネムーン以来かな？」

蘇我野の声「「はんで」ぞいます」

蘇我野、登場。亜乃と亮平、すこい勢いで食べ始める。蘇我野、それをゆっくりと眺めた後で、

第18場 アラスカのレストラン楽園（回想）

蘇我野「腹が減ればなんでもうまいとよく言いますがあれは嘘です。料理はもっと傲慢なものです。簡素に見える料理でも包丁を選び、まな板を選び、盛り付ける皿を選び、なにより食材を選びすぎらなければ成立しないんです。料理は選択です。私達は選んでるんです。より美味なるものをね」

井ノ口の声「どうしたんですか？」

蘇我野、退場。井ノ口、登場。

第19場 マンション・猫宮家の部屋・夜

亮平「どうしたって？」

井ノ口「だって急にうちに遊びに来いだなんてそんなこと言ってくれたことなかったじゃないですか？」

亮平「そろそろ食べたくなくなってきたんです。ホッキョクヒメイルカ。

こいつ、二人だけで食べるのもったいない。是非、井ノ口さん呼びたいって言ってますよ」

井ノ口「まあ好物はみんなで食べたほうが美味しいですからね」

三人、それぞれの思いで笑う。

亮平「井ノ口さん、飲み物は何がいい？」

井ノ口「何があります？」

亮平「ビールとワインぐらいいかないんだけど」

井ノ口「じゃあ安いワインでいいです」

亮平「はい」

井ノ口「ちよっとお手洗いお借りしていいですか？」

亮平「どうぞどうぞ。あっちです」

井ノ口、退場。亮平、井ノ口が出て行ったのを見て、ワインに睡眠薬を入れる。

亜乃「いいの？」

亮平「何が？」

亜乃「睡眠薬ってアルコールと一緒に服用しちゃいけないじゃないかな
かったつけ？」

亮平「馬鹿。それは効果が増幅するからだろ？今はそのほうがいい
の」

亜乃「うまくいくかな？」

亮平「大丈夫。すっごく油断してるよ」

亜乃「やっぱり、やめない？」

亮平「何言ってるんだよ？俺がこのままでもいいのかよっ」

亜乃「そうだけど」

亮平「俺に任せておけば大丈夫だから」

井ノ口の声「すっごい水槽ですね」

井ノ口、トイレから戻ってくる。

亮平「大したことありませんよ」

井ノ口「これ海豚用ですか？」

亮平「そうです」

井ノ口「これだけきれいだと海豚を飼ってるというより、海を飼って
るみたいですね」

亮平「大袈裟ですって。さあ座って」

井ノ口「そういえば海豚君は？」

亜乃「そろそろ帰って来ると思うけど」

井ノ口「あれ？どっか行ってるの？」

亮平「会社です」

井ノ口「何しに？」

亮平「仕事ですよ。そりゃあ」

井ノ口「仕事なんか行かせちゃって逃げないんですか？」

亮平「だってプーチンには言っていないんですもん。プーチン食べる
って」

井ノ口「そっか」

亮平「お前のこと食べるからなんて言ったら誰も帰って来ないでし
よ」

井ノ口「来ない。来ない」

亮平「何も知らないで暢気に帰って来ると思います。さ、井ノ口さ
ん、ごうざぞう」

井ノ口「あ、ありがとうございます」

井ノ口、ワインを受け取って、

井ノ口「へえ。この白ワイン。白ワインなのに、澱（おり）が入っ

てる。なんでだろう?」

亮平「(井ノ口の言葉を遮って) 乾杯!」

井ノ口「乾杯」

亜乃「乾杯」

三人、ワインを飲む。

井ノ口「なんだか6年前の入社式を思い出しますね、猫宮さん」

亮平「え?入社式?」

井ノ口「入社式ですよ。二人が社会に出た日。社会人になった日。

思い出しません?」

亮平「ちょっと思い出せないなあ?」

井ノ口「退屈な式抜け出して、近くのお店にパスタランチ食べに行
ったじゃない」

亮平「そうでしたっけ?」

井ノ口「覚えてないの?」

亮平「いや」

亜乃「(やばい雰囲気を感じして) それで?」

井ノ口「二人だけで食べたんですよ。イカ墨のパスタ」

亮平「それ、式抜け出したのばれちゃうでしょ、さすがに」

井ノ口「だから、文句言ったんですよ、私。でも大好きだからって」

亮平「いつも食ってるからかなあ。覚えてないです」

井ノ口「猫宮さん、言ったから。パスタ食いながら、なんでイカ墨
のスパゲッティがあって、タコ墨のスパゲッティはないんだろう

って。真っ黒な菌を出して言ったから。それ私おかしくて(と言

いながら、亮平が思い出したか、じっと見る)」

亜乃「あなた、覚えてるでしょ?」

亮平「そういえばうっすらと」

井ノ口「その後すぐ食べてみたんです。タコ墨のパスタ」

亮平「あ、あるんだ」

井ノ口「ありましたよ、すっごく探したけど」

亜乃「どんな味でした？」

井ノ口「あんたには言わない」

亜乃「え？」

井ノ口「嘘ですよ。どんな味だったかな。覚えてないんですよ。あの時のイカ墨の味はしっかり覚えてるのに」

亮平「思い出した。最後にコーヒーでうがいしたよね？あれかあ」

井ノ口「一生、忘れられない味なんだろ（うな）」

井ノ口、眠る。同時に音楽が聞こえてくる。

亜乃「寝た？」

亮平、井ノ口の鼻息を確認して、

亮平「寝たな」

亜乃「どうすんの、これから？」

亮平「どうすんのって？」

亜乃「料理する？」

亮平、台所へ包丁を取りに行く。そして、すぐ戻ってくる。

そのまま、寝ている井ノ口の前に行き、包丁を井ノ口の首にあてるが、土壇場で怖気づく。亮平、隅のほうで隠れて見ていた亜乃に包丁を渡して、

亮平「はい」

亜乃「え？」

亮平「どうぞ」

亜乃「私？」

亮平「いつも俺がやってるんだから、たまにはやってよ」

亜乃「そんな無理よ。人間よ？」

亮平「いいからやってって」

亜乃、包丁を握り締めるが、なかなか手が出せない。意を決して、井ノ口に包丁を突き刺そうとする。が、やっぱり刺せない。もう一度、意を決して、井ノ口に包丁を突き刺そうとする。が、またもや刺せない。それは、音楽に合わせて踊ってる様。

亮平「リラックス」

亜乃、井ノ口に近づく。包丁を今まさに刺そうとした瞬間。

井ノ口「本当はコーヒーじゃなくて紅茶でうがいましたんですよ？覚えてません？」

亮平「覚えてないな」

井ノ口「そうですか」

井ノ口、眠る。亜乃、井ノ口に近づく。包丁を今まさに刺そうとした瞬間。

井ノ口「でもねえ、墨汁じゃやっぱ、パスタ美味しくないんですよ」
亮平「そうですか？」

井ノ口「あれ、信用してない？もう、今度こそ馳走するぞー！」

井ノ口、眠る。

亜乃「起きてない?」

亮平「たまたまだろ?早くやってよ」

亜乃「もうばれてるんじゃない?」

亮平、井ノ口の寝息を確認する。

亮平「ばれてないよ。早くしないと本当にはれるぞ」

井ノ口「何がばれるの?」

亜乃・亮平「え?」

井ノ口、起きる。

井ノ口「俺、寝てた?」

亜乃「はい」

井ノ口「何がばれるの?」

亜乃「いや何も」

井ノ口「なんで包丁持ってる?」

亜乃、慌てて包丁をテーブルに置く。

亜乃「いや果物でも剥こうかなって」

井ノ口「まだメイン戻ってきてないのに」

亜乃「メインまだなのに」

井ノ口「せっかち?」

亜乃「ははは、せっかち」

井ノ口「果物は？」

亜乃「あつあー！果物も持ってなかった、おかしいね」

井ノ口、ゆっくりと、亮平と亜乃を交互に見て、包丁を手にする。

井ノ口「なんだよ。俺のこと食いたかっただけなんだ」

井ノ口、立ち上がって、

井ノ口「ちょっとはそうかなって思ってたんだよ。だって猫宮さんと俺、そんな仲良くないもん」

亮平「何言ってるんですか？仲いいじゃないですか？」

井ノ口「なんでうちに呼ばれるのか変だもん、(亜乃に)ね？」

井ノ口、包丁をテーブルに置き、上着を脱ぎながら、

井ノ口「でもいいよ、食べる？」

亮平「食べないなあ」

井ノ口「悪いけど、俺、美味いよ。もう美味中の美味」

亮平「今日は遠慮しますよ」

井ノ口「動物ってさあ、うまいもん食べてる時の顔と自分が食べられてる時の顔は一緒なんだ。どんな顔して食われんだろうね？俺、猫宮さん、美味そうに食ってくれんのかな？俺もつられて美味そうな顔してんのかな？ねえ、猫宮さん」

亮平「・・・」

井ノ口「ちゃんと食えよ！骨までしゃぶりつくせよ。頼むよー！こうやってさ、刃先を横にすればさ、スムーズに入るからよ、早くし

ろよ、早く入れろよ」

亮平「・・・」

井ノ口「あれえ、食べないの？」

亮平「・・・」

井ノ口「おかしいなあ。食べないなら、俺が食べるから」

攻守逆転して、今度は井ノ口が亮平を襲おうとした瞬間、

亜乃「待って」

井ノ口「何かな？」

亜乃「この人食べるなら私食べて」

井ノ口「へ？」

亮平「亜乃、やめろよ」

亜乃「私、食べられる。井ノ口さんに食べられる」

井ノ口「ああそう。そういうこと？」

亜乃「そういうこと」

井ノ口「じゃ、遠慮なく」

今度は井ノ口が亜乃を襲おうとした瞬間、

亮平「待って」

井ノ口「何？」

亮平「こいつを食べるなら俺を食べる」

井ノ口「は？」

亜乃「りようちゃん」

亮平「俺こそ食べられる。井ノ口さんに食べられる」

井ノ口「ああそう。仲良いんだね。じゃ、まあ、遠慮なく」

今度は井ノ口が亮平を襲おうとした瞬間、

亜乃「待って」

井ノ口「今度は何？」

亜乃「この人食べるなら私を食べて」

井ノ口「また、それ？」

亮平「亜乃！」

亜乃「私、食べられる。井ノ口さんに食べられる」

井ノ口「聞いてもいい？」

井ノ口、亜乃を羽交い絞めにして、

井ノ口「奥さん、猫宮さんのどこがそんなに好きわけ？」

亜乃「顔！」

井ノ口「見た目かよ」

亜乃「だけじゃなくて、人としてダメなところ」

亮平「俺のどこがダメなんだよ？」

亜乃「主体性ないじゃん」

亮平「あるだろ、主体性」

亜乃「ないよ、主体性。全部、私が決めてきたでしょ？結婚も今の生活も井ノ口さん食べようとしたことも。全部私が決めたの」

井ノ口「いいね。奥さん。あんたに嫉妬してきたよ。やっぱさあ、

猫宮さんから食べるよ」

亮平「ああ！」

亮平、逃げる。

井ノ口「何で逃げるの？俺達一つになれるんだぜ？」

亜乃「やめてよ」

井ノ口「(キレて) やめねえよ！猫宮さん、俺だけのもんだもん」

井ノ口、亮平にとどめを刺そうとした瞬間、プーチン、登場。

プーチン「何やってんの？」

プーチン、様子を丁寧に見る。

亮平「プーチン、助けて」

プーチン「え？え？もしかしてりょうちゃんを、食べようとしてる？」

井ノ口「うん。ダメ？」

プーチン「美味しいの？」

井ノ口「まだ味はわからないんだ」

プーチン「そう」

井ノ口、亮平を食べようとする。

亮平「プーチン、助けてよ！」

プーチン「ねえ」

井ノ口「なんだよ」

プーチン「りょうちゃんは食べちゃダメなんだよ」

井ノ口「はい？」

プーチン「僕、大好きなんだから、りょうちゃん」

井ノ口「知ってる？好きな人ってお腹にずっしりくるんだぜ？俺大好物」

プーチン「好きな人って食べちゃいけないんだよ」

井ノ口「なんで？なんで好きな人は食っちゃいけないの？」

プーチン「だって食べたなら消えちゃうでしょ？」

井ノ口「何言ってるんだよ。食べるからずーっと一緒になれるんじゃない？」

プーチン「でも話ができないでしょ？」

井ノ口「できるよ。ちゃんと聞こえるよ。心の声」

プーチン「心の声じゃなくて物理的な声が聞こえなくなっちゃおうでしょ？」

井ノ口「お前、そんな表面的なことのために、好きな人食えないの？」

プーチン「・・・」

井ノ口「俺は猫宮さん食って、一つになりたいんだよ。ちゃんと話したいんだよ。それがいけないこと？」

プーチン「・・・」

井ノ口「好きだから、食いたいって思うから、食べるの。だってお腹は空くんだから。猫宮さん骨まで食べれたら、俺、もっと軽くなれる。見てて。もっともっと軽くなるよ。もう我慢しない。お腹と背中がくっつくもん。ねえ、猫宮さん」

亜乃、井ノ口を後ろから、ワインボトルで殴る。

亜乃「井ノ口さん正しい。何も問題ない。食いたいって思ったなら食べるの。食べさせたいって思ったなら食べさせるの。りょうちゃん
が人間に戻れるなら、私」

亜乃、井ノ口に近づく。プーチンが遮る。

亜乃「プーチン、どいて」

プーチン「・・・」

亜乃「どいてよ！」

プーチン「井ノ口さんは人間でしょ？」

亜乃「ミ、」

プーチン「亜乃さんも人間だよ。人間が人間を食べていいの？」

間。

亜乃「プーチン、なんでりょうちゃんのスーツ着てるの？」

プーチン「え？りょうちゃんの代わりに仕事に行ってきたんだ」

亜乃「どういうこと？」

プーチン「亜乃さん言ってたじゃん。僕が少しずつ人間になってる代わりにりょうちゃんが少しずつ海豚になってるって。だから、

僕が稼がなきゃって思ってる」

亜乃「さわらないで！」

プーチン「どうしたんですか？」

亜乃、包丁を手に取り、プーチンに向ける。

プーチン「え？」

亮平「亜乃、何やってんだよ？」

亜乃「プーチン、食べよ」

亮平「は？なんでプーチン食べなきゃいけないわけ？」

亜乃「りょうちゃんが海豚になったの、プーチンを飼い始めたからなのよ」

亮平「どどういう意味？」

亜乃「プーチン食べるの止めたから海豚になったの」

亮平「何言ってるんだよ」

亜乃「海豚食べて海豚になった？そんなのおかしいでしょ？だって

牛食べたら牛になる？豚食べたら豚になる？」

亮平「だから、これはそういう病気なんだよ」

亜乃「もしプーチン食べるの止めたから海豚になったんだとしたら？食べ物やペットにしたから。だってね、あの時食べなかったプーチンが、あなたの代わりに人間になってるのよ？」

亜乃、プーチンに包丁を向けたまま、一歩近づく。

プーチン「亜乃さん」

亜乃「ミ、」

プーチン「僕、食べるの？」

亜乃「ミ、」

プーチン「僕歩けるよ。言葉も喋れるよ。人間になったんだよ。僕、人間になったんだよ」

亜乃「なんで人間になってるのよ？」

プーチン「亜乃さんと同じもの食べたくてりょうちゃんと同じ服着たくて、二人と同じもの見て笑いたかっただけなんだよ」

亜乃「プーチン、許して」

亮平「やめろよ」

亜乃「やめない」

亮平「やめろって」

亜乃「一人で食べれるの？あなたが一人で殺して一人で食べれるの？」

亮平「家族のように気持ちかわかるようになってきたって言ったよな？かわいくなってきたって言ったよな？」

亜乃「この子は海豚なの。あなたが買った食用の海豚なの」

亮平「食べちゃダメなんだって、、やめろって！」

亜乃、包丁を振り上げ、今まさに振り下ろそうとするが、振り下ろせない。

亜乃「なんであの時、食べなかったんだらう？」

プーチン「……」

亜乃「君が水槽から初めて逃げ出した時」

プーチン「……」

亜乃「あの時食べてたら、どんなに……」

プーチン「やめてよ。亜乃さんは僕を食べるんだよ。何を言おうと殺して食べるんだよ。涙いらぬから。同情いらぬから」

亜乃「……」

プーチン「亜乃さん、お米研いでもいい？」

プーチン、お釜を台所から持ってくる。

プーチン「お米研ぐ時ってね。一番最初のお水はパッと捨てなきゃいけないの。こんな感じ。シャッシャッシャッと。一粒一粒さ、丁寧に研ぐとき、水たくさん吸って、ふっくらとしたご飯になる」

プーチン、亜乃を見る。

プーチン「生きたいなあ。生きたいなあ。亜乃さん」

亜乃「(観客に)『ご飯が炊けるまであと一時間。私はこのプーチン、いやホッキョクヒメイルカを包丁で刺した。血を抜いた』」

亜乃の仕草に合わせて、プーチンは倒れ、死んでゆく。

亜乃「プーチン、いやホッキョクヒメイルカは少しずつ海豚でもな

くなっていた。肉になつていった。それを私は丁寧に捌いた。

そしてちようど一時間後、ご飯が炊けた。私達は、食べた」

亮平「わざわざつけなきゃ」

亜乃「二人で内臓までレバーまで食べた。プーチン、いやホツキョクヒメルカ、いやプーチンを、食べた」

亜乃と亮平は、丁寧に丁寧に箸を口に運ぶ。そしてゆっくりと暗転。

終わり。